

アウグスト・ベーク
『文献学的な諸学問のエンチクロペディーならびに方法論』
— 翻訳・註解（その2）—

安 酸 敏 眞

II. とくに文献学に関連してのエンチクロペディーの概念

§7. 文献学の理念を議論したのち、われわれはエンチクロペディーということは何を理解するのかを、まず説明しなければならない。そしてその次に、この概念を文献学との関係において考察しなければならない。われわれは文献学的なやり方に従って、この言葉の意義から出発する。シュタングの『神学的雑録』*Theologische Symmiktika*¹ 第一部, No.6, 166 頁以下(ハレ, 1802 年)は、この名称について書かれた論文を収録しているが、そのなかで彼はこう主張している。このエンチクロペディーという名称はエンチクロペディーがもたなければならない連関を表示している、と。これは広く流布している見解である。ギリシア語の表現はエンキュクリオス・パイディア (ἐγκύκλιος παιδεία) [全般的な教養] である。なぜなら、エンキュクロパイディア (ἐγκυκλοπαιδεία) はクインティリアヌス [Marcus Fabius Quintilianus, 35

頃-100 頃。ローマの修辞家。『雄弁家教育論』*Institutio Oratoria*, 12 巻を著す。] [『雄弁家教育論』] 第一卷第一〇章における間違った読み方だからである²。さて、エンキュクリオス (ἐγκύκλιος) という言葉

¹ Theodor F. Stange, *Theologische Symmiktika* (Halle, 1802-1805). この書は三部からなり、第一部 (Tl. 1) と第二部 (Tl. 2) は 1802 年に、第三部 (Tl. 3) は 1805 年に出版されている。

² ベークはこのように述べているが、われわれが調べた範囲では、クインティリアヌスの当該テキストでは、“encyclopaideia”ではなく“encyclion paedian”となっている。但し、Loeb Classical Libraryの編訳者は、この表現が“encyclopaedia”の語源となったと注記している。なお、念のため原文

は、早期に円環運動から生じたもので、例えばアリストテレスの『気象学』I, 2, 339^a 12³ がそうである。だが円環運動は完全にそれ自体において閉じられているので、「^{エンチクリッシュ}円環的教化」(encyklische Belehrung)とは、概念的にそれ自体において完結しており、一つの学問分野(Disciplin)あるいは学問の全範囲を関連づけて一通り叙述するやり方を意味することになる。しかしながら、パイデア(παιδεία)と結合すると、エンキュリオスとはつねに異なった意味をもつ。若者が人間性に関心をもって習得しなければならぬようなすべてのことを、ギリシア人はエンキュリオス・パイデア(ἐγκύκλιος παιδεία)、エンキュリア・マテマタ(ἐγκύκλια μαθήματα)〔全般的な学問〕、あるいはパイデウマタ(παιδεύματα)〔教えられる内容、教科〕と名づけた。それはさしあたり通常の範囲の教養に属する事柄の総体であるが、その際に何らかの仕方での一つの体系的な連関が考えられているのではない。エンキュリオスという言葉は、ヘシキオス〔5世紀のアレクサンドリアの文法学者。一般的ではない言葉や語句についてのギリシア語の辞書を編纂した。〕がそれを「エンキュリア——生活に取り囲まれ、慣れ親しんでいるもの」(ἐγκύκλια τὰ ἐγκύκλουμένα τῷ βίῳ καὶ συνήθῃ)と説明しているように、もともと「通常のもの」という意味を

を引用すると、以下の通りである。“Haec de grammaticae, quam brevissime potui, non ut omnia dicerem sectatus, quod infinitum erat, sed ut maxime necessaria. Nunc de ceteris artibus quibus instituendos priusquam rhetoric tradantur pueros existimo strictim subiungam, ut efficiatur orbis ille doctrinae quem Graeci encyclion paedian vocant.” Quintilian, *The Orator's Education Books 1-2*, edited and translated by Donald A. Russell (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 2001), p. 213.

³ ベークが挙げているこの数字は、ベッカー版の頁数であるが、邦語訳で引用すれば下記の通りである。「円環的に移動する諸物体〔諸星〕の自然がそれから組成されている諸物体〔諸星〕の一つの始源について、さらにまた、その他の四つの始源による四つの物体〔元素〕についてもさきに規定された。」『アリストテレス全集』第5巻、泉治典・村治能就訳『気象論・宇宙論』(岩波書店, 1976年), 4頁。

もっている。イソクラテス [Isokrates, B.C. 436-338. アテナイの雄弁家。青少年のための学校を創設し(B.C. 392)頃)、広い学識をもって弁辞の術を教授し、プラトンなどの哲学の学校と対抗した。] (III, 22) は、「エンキュクリオスな出来事と日毎の出来事とにおいて」(ἐν τοῖς ἐγκυκλίους καὶ τοῖς κατὰ τὴν ἡμέραν ἐκάστην γιγνομένοις) と述べて、通常的事物の循環と日常的な事物の循環とを結合している。すでにアルコン [古代ギリシアの都市の執政官。アテナイなどの複数制の最] のエウクレイデス以前に、通常の規則的な支出という意味でのエンキュクリア・アナローマタ (ἐγκύκλια ἀναλώματα) [通常の支出] が、碑文のなかに存在している。^{*} 同様に、エンキュクリオイ・レイトウールギアイ (ἐγκύκλιοι λειτουργίαι) [規則的な公への奉仕] や、エンキュクリオス・エイコステ (ἐγκύκλιος εἰκοστή) [規則的な税金] も存在する。アリストテレスの作といわれている国家の経済に関する書物では、タ・エンキュクリア (τὰ ἐγκύκλια) [日常的な事柄] は日常的な流通を意味している。^{**} アリストテレスの『政治学』第一巻第七章, 1255^b 25 では、奴隷のエンキュクリア・ディアコネーマタ (ἐγκύκλια διακονήματα) [日常の奉公の仕事] について語られている。これはつまり通常の日常的な奉仕、通常の業務範囲のことである。同様に、第二巻第五章, 1263^a 21 のエンキュクリオイ・ディアコニアイ (ἐγκύκλιοι διακονίαι) [日常の用事] と、第二巻第九章, 1269^b 35 のタ・エンキュクリア (τὰ ἐγκύκλια) [日常生活に属すること] は、日常的な職業範囲に存しているところのものである。アリストテレスの名前で保存されている『問題集』は— これらは学問的連関を全く欠いているが—, ゲルリウス [Aulus Gellius, 123頃-165。ローマの文法家。彼の唯一の著作『アッティカの夜』 *Noctes Atticae* (20巻) は、彼がギリシアに滞在した冬の夜に材料を集めて書いた論集で、古代の言語と文学、習慣、法律、哲学、自然科学などに関する注釈や雑多な情報を含んでいる。] の『アッティカの夜』 *Noctes Atticae* 第二〇巻第四章においては、エンキュクリア・プロブレーマタ (ἐγκύκλια προβλήματα) [一般的な諸問題] と名づけられるが、その理由はそれがありふれた表象の圏域に存しているいろいろな問いを取り

^{*} *Staatshandlung der Athener*. 2. Aufl. II, 237.

^{**} *Staatshandlung der Athener*. I, 412. エンキュクリオス (ἐγκύκλιος) という言葉全般に関しては、ブットマンのパピルス文書の説明に対するベークの註釈 (『ベルリン・アカデミー論文集』 [1824], 97頁) を参照されたい。

扱っているからである。つまりそれは通俗的な学問的諸問題ということである。アリストテレスはエンキュクリア・フィロソフエーマタ (ἐγκύκλια φιλοσοφήματα) [一般的な哲学的論議]⁴ を執筆した。これは保存されている『問題集』と同一のものではなく(シュタール『アリストテリア』 *Aristotelia*⁵, II, 278頁と279頁を参照), 対話的な書物であった(ベルナイス『アリストテレスの対話』 *Die Dialoge des Aristoteles*⁶, 93頁以下, とくに123頁以下)⁷。だがここからして, この表現は明らかに, ヴェルカーの『一連の叙事詩的作品』 *Epischer Cyklus*⁸, 第一巻, 49頁がそれを説明しているように, 諸学問の通俗的な全体を表示するものではなく, 通俗的な哲学的論議 (populäre Philosopheme)⁹ を指し示しているにすぎない。それゆえ, 一般的な語法に対応して, エンキュクリア・パイデウマタ

⁴ アリストテレスの『天体論』(περὶ οὐρανοῦ De caelo) 279^a30には, “ἐν τοῖς ἐγκυκλίους φιλοσοφήμασις”という表現が見出されるが, 邦訳ではこの箇所は「世間流布の哲学談議」と訳されている。『アリストテレス全集』第4巻, 村治能就・戸塚七郎訳『天体論・生成消滅論』(岩波書店, 1976年), 40頁。

⁵ Adolf Stahr, *Aristotelia*, 2 Bde. (Halle: Verlag der Buchhandlung des Waisenhauses, 1830-1832).

⁶ Jacob Bernays, *Die Dialoge des Aristoteles in ihrem Verhältnisse zu seinem übrigen Werke* (Berlin: Hertz, 1863).

⁷ ここで言及されている書物は, 現存してはいないものの, 幾つかの断片からその存在が確実視されている, 『哲学について』(Περὶ φιλοσοφίας) と称される三巻本の書物のことであろう。『アリストテレス全集』第17巻, 今道友信・村川堅太郎・宮内璋・松本厚訳『詩学・アテナイ人の国制・断片集』(岩波書店, 1977年), 625-656, 844-855頁参照。

⁸ Friedrich Gottlieb Welcker, *Der epische Cyclus oder die hometischen Dichter*, 2 Bde. (Bonn: Weber, 1835-1849; 2. Aufl., 1849-1865).

⁹ Philosophem はギリシア語の“φιλοσοφήμα”に由来しており, 一般的に, 「哲学的な論議」, 「哲学的主張」, 「哲学上の学説」などを意味する。例えば, アリストテレスの『トピカ』(Τοπικά, Topica) VIII, 11, 162^a15 にこの語が見出される。

(ἐγκύκλια παιδεύματα)〔通常の教科内容〕は、例えばプルタルコス『少年たちの教育について』*de educatione puerorum* 第十章に見出されるように、まずもって通常の教育手段のことである。以上の根本的意義からさらに帰結してくることは、つぎに、一般的教育としての円環的教育は、特殊な専門教育ないし職業教育とは対置されるということである。かくしてストラボンは〔『地理書』〕第一卷第二十二章で次のように言う。すなわち、歴史叙述において、ひとは「政治家を全面的に無教養な人ではなく、エンキュリオスでもあり、自由人や哲学学徒の場合に普通でもある教育課程に与ったことのある人」(πολιτικὸν οὐχὶ τὸν παντάπασιν ἀπαιδευτον, ἀλλὰ τὸν μετασχόντα τῆς τε ἐγκυκλίου καὶ συνήθους ἀγωγῆς τοῖς ἐλευθέροις καὶ τοῖς φιλοσοφοῦσιν)と呼ぶ、と。いまやひとは一般的な、すなわちすべての自由人に必要不可欠な教育に、万有についての決して深く掘り下げられていない一定の知識を数える。それにしたがえば、エンチクロペディーはあらゆる知についての一般的な知識、つまりクインティリアヌスが〔『雄弁家教育論』〕第一卷第十章で訳しているように、学の集合体 (orbis doctrinae)¹⁰を意味している。そこでウィトルーウィウス [Polio Marcus Vitruvius. 紀元前1世紀のローマの建築家・建築理論家。アウグストゥスに献呈された10巻本の『建築書』]はこの言葉を次のように用いる(第六書への序文)。「彼ら〔両親〕はわたしが技術に精通するように気を配り、しかもその技術は文学やすべての知識を総合した学問がなくては、検証されえないものである」(Me arte erudiendum curaverunt et ea quae non potest esse probata sine litteratura encycloque doctrinarum omnium disciplina)¹¹, と。たしかにウィトルーウィウスは、第一書第一章ではあらゆる学科の連関を指し示している。「すべての学問は相互に内容の

紀のローマの建築家・建築理論家。アウグストゥスに献呈された10巻本の『建築書』はこの言葉を次のように用いる(第六書への序文)。「彼ら〔両親〕はわたしが技術に精通するように気を配り、しかもその技術は文学やすべての知識を総合した学問がなくては、検証されえないものである」(Me arte erudiendum curaverunt et ea quae non potest esse probata sine litteratura encycloque doctrinarum omnium disciplina)¹¹, と。たしかにウィトルーウィウスは、第一書第一章ではあらゆる学科の連関を指し示している。「すべての学問は相互に内容の

¹⁰ Loeb Classical Library の編訳者 Donald A. Russell は、この語句を “the course of learning” と意識している。Quintilian, *The Orator's Education Books 1-2*, edited and translated by Donald A. Russell (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 2001), p. 213.

¹¹ 森田慶一訳註『ウィトルーウィウス 建築書』(東海大学古典叢書), 東海大学

関連と交流をもっている」(omnes disciplinas inter se conjunctionem rerum et communicationem habere)¹²。そしてこれに関係して、「エンキュクリオスな学問は、実に、一個の人体のようにその肢体から構成されている」(encylios disciplina uti corpus unum ex his membris est composita)¹³と述べている。しかし彼は、このような^{エンチクリッシュ}円環的教育のなかには、すべての学科の一般的な要素が存しているということを示唆している。それゆえ理念は、「すべてのことにおいて或るものである」(in omnibus aliquid)ということであるが、しかしながらそこから「全体において何物でもない」(in toto nihil)ということとは帰結しない。すべてのことにおいて何かを知っていない人は、何事においても何かを知ることはできない、と古典古代の人々は考えた。彼らのエンキュクリオス・パイディア(ἐγκύκλιος παιδεία)はそこに由来する。

さて、もしエンチクロペディーという名称が一つの学問に適用されるのであれば、それは首尾一貫して、その学問のいろいろな特殊な部分に対して、この学問についての一般的な叙述を表わす。連関は必ずしもそれと

出版会、1969年、265頁参照。この翻訳書は、ラテン語原文と日本語の対訳が見開きで読める形になっているが、訳文のみを1冊にした普及版の『ウィトルーウィウス 建築書』(東海選書)、東海大学出版会、1979も今では出ている。なお、古典叢書版の方には、訳者によるウィトルーウィウスについての解説が載っている。それによれば、ウィトルーウィウスについては、彼が *De architectura* と題する書物の著者であるという以外には、彼の出生地も家系も生涯についても全く知られていないという。しかしこの建築学の古典となった書物が、アウグストゥスの時代に成立したことは、疑問の余地がないと見なされている。

¹² 同上、15頁参照。

¹³ 森田慶一氏の訳文では、“encylios disciplina”は「学問全体」となっており、“encylios disciplina”は直前の“omnes disciplinas”とほぼ同義に理解されている(同上、15頁)。しかしわれわれは、エンチクロペディーの語義を説明しようとしているベークの意を汲んで、ここでは敢えてそのまま「エンキュクリオス」と表記することにする。

結びついてはいない。それゆえ、まったくアルファベット順のエンクロペディーを作り上げることもできる。わたしはそれによって、エンクロペディーはいかなる連関をもつことができない、などと言うつもりはない。エンクロペディーとしては、それは連関をもたない、と言っているにすぎない。しかし一つの学問のエンクロペディーそのものが、学問として叙述されるべきであるとすれば、もちろんそのなかにはきわめて厳密な連関がなければならない。このことは学問一般の本質に存しているが、しかしそれはとくにそのようなエンクロペディーにおいて立ち現れてこなければならない。なぜなら、まさに連関がそれに基づいている、一般的なものは——というのは、特殊なものは一般的なものによって結合されるからであるが——、際立ったものだからである。文献学がこのような仕方全体として叙述されるということは、個々の部分が——まさに非常に多くの断片がちりぢりばらばらになるように——さまざまな頭脳に分割されていなければならないほど、ますます必要である。

エンクロペディーの叙述において、どの程度個別的なものに踏み込まなければならないかというその尺度は、学問的には規定することができない。可能性と目的とがそれを規定するのである。ひとはエンクロペディーを非常に詳細かつ究明的に構想することができる。そうすれば最も偉大な学者をも教示するものとなる。しかし逆に、ひとはそれをまったくの初学者向けに当て込むこともできる。なぜなら、一般的なものはここでは、相対的には、モノグラフィー的論述との対比においてのみ理解されるからである。われわれがこれを加工する際の主要目的は、文献学の学問的連関についての意識を生み出すことである。われわれはそれゆえ、実行する上で一定の中道路線を固守し、瑣事拘泥の注釈を施すのではなく、つねに本質を目指すであらう。

III. 文献学的な学問のエンクロペディーについての従来の試み

§ 8. 文献。理念と普遍的なものへと向けられた、ドイツ人の包括的な精神は、他の多くの学問においてと同様、ここでも結合し整理し始めた。要

するに、文献学的諸学問の総体を描き始めた。文献学のエンチクロペディッシュな叙述の最初の試みは、ハンブルクのヨーハン・ヴァン・デア・ヴォヴェーレン (ヴォヴァー, ヴォウヴァー, またはウォウエリウス) [Joannes Wouweren (Johann von Wovern / Johann van der Wovern / Johannes Wouweren / Ioannes Woveus), 1574-1612. ルネサンス期のドイツの人文学者・古典文献学者。] の書物『博学についての取り扱い—古典古代研究についての完全な著作の断片』*De polymathia tractatio, integri operis de studiis veterum ἀποσπασμάτιον*—最初にハンブルクで1604〔3〕年に編集され、最終的にヤーコブ・トマジウスによって1665年に編集されたもの¹⁴—とグロノヴィウス [Jakob Gronovius, 1645-1716. ドイツの古典学者。] の『ギリシア古代の宝物』*Thes. Gr. antt.* T.X.¹⁵ のなかに見出される。ヴォヴァーは、国務においても偉大であり、その学殖を別としてもリベラルな見識によって卓越していた人物であった。この書物はももとは博学を擁護するために書かれたものであるが、それは人々がヴォヴァーを文法学者として扱ったからである。さて、この著作は文献学についての真に包括的な叙述を提供するものではないが、それにもかかわらず、いまここで言及する価値がある。もちろんそれは、体系としては批判に耐えないようなつくりになっている。たしかにそれは、一貫して確固とした概念と豊富な学識を含んでいるが、しかしそこには体系的な精神が欠けている。ヴォヴァーはその時代の最も体系的な頭脳の持ち主の一人ではあったが、それにもかかわらず、そのような体系的な精神はまだその時代のものとなっていなかった。とはいえ、後代の人々がないがしろにしてはならなかったものが、彼においては見出される。例えば、彼が修辞学をみずからの博学へ引き入れるやり方である。—異なった精神で考えられているのが、ヨハン・マッティアス・ゲスナー [Johann Matthias Gesner, 1691-1761. ドイツの古典学者。アンスバッハやライプツィヒのギムナジウム校長を務めたのち、ゲッティンゲン大学創立とともに、1734年、修辞学の教授に就任。] の『普遍的な学識、ことに文献学的・歴史的・哲学的な学識、ならびに講義

¹⁴ Ioan A. Wovver, *De polymathia tractatio. Integri Operis de studiis veterum ἀποσπασμάτιον* (Hamburg: Frobenius, 1603; Lipsia, 1665).

¹⁵ Jakob Gronovius, *Thesaurus Graecarum Antiquitatum*, 13 Bde. (Lyon, 1697-1702; 2. Aufl. Venedig, 1735.).

の活用へと導かれた第一線の序論』*Primae lineae isagoges in eruditionem universam, nominatim philologiam, historiam et philosophiam, in usum praelectionum ductae* (第一版, ライプツィヒ, 1756年)である。本書の第四版は、ヨージョハン・ニコラウス・ニクラス [Johann Nicolaus Niclas, 1733-1808. ドイツのギムナジウム校長。] によって、みずからの講義を添えた2分冊のかたちで、1784年にライプツィヒで出版されている。これは実際に卓越しており、非常に興味深い書物であるが、それはその専門の最も偉大な学者の一人が、もちろんいろいろな逸話や冗談や悪ふざけなどをふんだんに交えながら、その時代の精神にしたがって自由に講義しているのを、そこに聴くことができるからである。表題がただちに示しているように、本書は体系的な要求をなすことはできない。それにまた文献学にもっぱら関わるものではなく、むしろ一般的なエンチクロペディーであり学問習得のための手引きである。— エシエンブルク [Johann Joachim Eschenburg, 1743-1820. ドイツの批評家・文学史家。] の『古典文学のハンドブック』*Handbuch der klassischen Literatur* (ベルリン, 1783年; 第8版, L. リュトケ, 1837年)は、文献学の学問的養成にとっては意義を欠く教科書であり、ここで言及する価値はほとんどない。— この時点にいたるまでは、ひとはエンチクロペディーという名称については考えていなかったが、もちろんこの名称は基本的にまったく偶然的なものである。この名称を一定の概念をもって最初に流通させたのは、フリードリヒ・アウグスト・ヴォルフである。彼は1785年以降ハレで、「古典古代研究のエンチクロペディーと方法論」という名称のもとに講義を行い、文字に書かれたものとしてはさしあたり非常に不完全ながら、未完のままになった数枚の草稿「ギリシアの古美術品」(ハレ, 1787年)において、その内容を議論した。— 彼の弟子たちは彼の理論を性急に公にしたが、このことはとくにフューレポルン [Georg Gustav Fulleborn, 1769-1803. ドイツの哲学者・文献学者。フレスラウ大学の古典学教授。] の『文献学のエンチクロペディーないし古典文学研究への第一線の序論』*Encyclopaedia philologica seu primae lineae isagoges in antiquarum litterarum studia* (ヴラティスラヴィアエ, 1798; カウルプスによる新版, 1805年)について当てはまる。— まさにだからこそ、エアドゥイン・ユリウス・コッホ [Erduin Julius Koch, 1764-1834. ドイツの文学史家・古典文献学者。] の『あらゆる文献学的

学問のエンクロペディー』*Encyklopädie aller philologischen Wissenschaften* (ベルリン, 1793年)に触れられた。コッホの見解は、ズルツァーの手短な諸学問の総括の中に、またコッホの『大学研究に対する手引き』*Hodegetik für das Universitätsstudium* (ベルリン, 1792年)¹⁶, 64-98頁の中にも見出せる。—最後に、ヴォルフ自身は、もちろん約束していた大部の著作においてではなく、「古典古代学研究的の叙述」という表題でヴォルフとブットマン [Philip Karl Buttmann, 1764-1829. ドイツの文献学者。ベルリンのギムナジウム校長。ベルリン・アカデミー会員。ペークの古くからの友人。] 共編の『古典古代学の博物館』*Museum der Alterthumswissenschaft*¹⁷ 第一巻 (ベルリン, 1807年)に収録されている短い概要において、彼の見解を完全に公にした。—ヴォルフの死後、彼の諸々の講義はシュトックマンによって編集され、『フリードリヒ・アウグスト・ヴォルフの文献学のエンクロペディー』¹⁸ (ライプツィヒ, 1831年)として出版された。1845年にいたるまでの文献の概観を備えた第二版は、1845年にヴェスターマンによって編集出版された。これ以外に、ギュルトラーによって編集出版されたもの (ライプツィヒ, 1831; ²1839)¹⁹もある。—ヴォルフの書物と同時に、シャーフ [Christian Ludwig Schaaff, 1780-1850. ドイツのプロテスタント教師・教師。] の『古典古代学のエンクロペディー』*Die Encyklopädie der klassischen Alterthumskunde* (マクデブルク, 1806年; 第二

¹⁶ Erduin Julius Koch, *Encyklopädie aller philologischen Wissenschaften an allen Facultäten* (Berlin, 1793).

¹⁷ Friedrich August Wolf und Philipp Buttmann (Hrsg.), *Museum der Alterthumswissenschaft*, Bd. 1 (Berlin: Realschulbuchhandlung, 1807); Bd. 2 (Berlin: Realschulbuchhandlung, 1810).

¹⁸ Friedrich August Wolf, *Friedrich August Wolf's Encyclopaedie der Philologie*. Nach dessen Vorlesungen im Winterhalbjahre von 1798-1799 herausgegeben von S. M. Stockmann (Leipzig: Die Expedition des europäischen Aufsehers, 1831).

¹⁹ Friedrich August Wolf, *Vorlesung über die Encyklopädie der Alterthumswissenschaft*. Herausgegeben von J. G. Gürtler (Leipzig: Lehnhold, 1831; ²1839).

版, 1808年)²⁰ が現れた。その第一部は三つの小区分に分かれ、ギリシア人とローマ人の文学史と、両民族の神話を含んでおり、第二部も同様に三つの小区分に分かれ、ギリシア人とローマ人の古典古代美術と両民族の芸術史を含んでいる。そのような著作はひとしくみずからを学問的でないものと予告し、そして第一版ではあらゆる事柄に関して、きわめて多くの間違いや、とんでもなくひどい誤解を含んでいる。さまざまな小区分は当該学問分野の概要であり、本来はエシエンブルクの書物同様、上級の学識ある学生向けのものであり、個々に6回の版を重ねている。— これに対して、アスト [Georg Anton Friedrich Ast, 1778-1841, ドイツの哲学者・文] の『文献学の概要』 *Grundriss der Philologie* (ランズフート, 1808年) は、学問的な趣をもって登場している。間違いなくそこには多くの長所が見られるが、しかしこの才気溢れる人物のすべての書物におけると同様、過度に熱狂的なところと気取ったところがある。万事に通じているとの自惚れのみが、これらの書物を台無しにしている。— エンチクロペディーの最良の作品は、ヴォルフ的な見地から出発しているベルンハルディー [Gottfried Bernhardt, 1800-1875, ドイツの文] の『文献学のエンチクロペディーのための基本線』 *Grundlinien zur Encyclopädie der Philologie* (ハレ, 1832年) である。— アウグスト・マッティエ [August Heinrich Matthiae, 1769-1835, ドイツの] は、文献学のエンチクロペディーと方法論を遺作として残したが、これは彼の死後息子によって編集出版された (ライプツィヒ, 1835年)。— その後30年代にはさらに、サミュエル・フリードリヒ・ヴィルヘルム・ホフマン [Samuel Friedrich Wilhelm Hoffmann, 1803-1872, ドイツの文献学者。] の『古典古代学』 *Alterthumswissenschaft* (ライプツィヒ, 1835年)²¹ と、カール・ゲ

²⁰ Johann Christian Ludwig Schaaff, *Encyclopädie der classischen Alterthumskunde, ein Lehrbuch für die oberen Classen gelehrter Schulen*, 2 Bde. (Magdeburg, 1806-1808).

²¹ Samuel Friedrich Wilhelm Hoffmann, *Die Alterthumswissenschaft. Ein Lehr- und Handbuch für Schüler höherer Gymnasialclassen und für Studierende*. (Leipzig: Hinrichs, 1835).

ルハルト・ハウプトの『一般的な学問的古典古代学ないし古典古代の具体的精神の発展とその体系』*Allgemeine wissenschaftliche Alterthumskunde oder der concrete Geist des Alterthums in seiner Entwicklung und in seinem System* 三巻本(アルトーナ, 1839年)が出版された。— 才気に富んだ仕方で叙述された、珍しい種類のエンチクロペディッシュな著作は、ブレーメンのギムナジウム校長のヴィルヘルム・エルンスト・ヴェーバーによる、『古典古代学, ないしギリシア人とローマ人の内面生活に関する地理的見解ならびに最重要契機についての概観的叙述 — 序論に簡潔な文献学の歴史を付す』*Klassische Alterthumskunde, oder übersichtliche Darstellung der geographischen Anschauungen und der wichtigsten Momente an dem Innenleben der Griechen und Römer, eingeleitet durch eine gedrängte Geschichte der Philologie* である。諸学問と諸学芸の新しいエンチクロペディーのなかでは、第四巻がとくに復刻されている(シュトットガルト, 1848年)。けれども、非常に大衆受けしているのは、本来的に古典美術品だけである。— [E・ヒューブナー『古典的文献学の歴史とエンチクロペディーに関する講義の概要』*Grundriss zu Vorlesungen über die Geschichte und Encyklopädie der klassischen Philologie* (ベルリン, 1876年)。]

アルファベット順のエンチクロペディーのなかでは、わたしとしては以下のものを挙げる。ヘデリヒ『事典』*Reales Schullexikon*, 二巻本(ライプツィヒ, 1748年)。— フンケ『新事典』*Neues Realschullexikon*, 五巻本(ブラウンシュヴァイク, 1805年)。『小事典』二部, 第二版(ハンブルク, 1818年)という表題での同書の抜粋版。— クラフトとコルネリウス・ミュラー『事典 — フンケの小事典の全面改定版』*Realschullexikon. Eine gänzliche Umarbeitung von Funke's kleinem Realschullexikon*, 上製二巻本(ハンブルク, 1846-1853; 1864)。— パウリーの死後クリスティアン・ヴァルツとトイフェルによって継続された, アウグスト・パウリー『古典古代学事典』*Real-Encyklopädie der klassischen Alterthumswissenschaft, nach Pauly's Tode fortgesetzt von Chr. Walz und Teuffel*, 六巻本(シュ

トゥットガルト, 1839-1852年), 第一巻, 第二版(1864-66年)。— チャールズ・アントン『古典学辞典』 *Classical Dictionary* (ニューヨーク, 1843年), 上製の大八つ折り版, 内容豊富な著作。— 多くの教師と一体となってフリードリヒ・リュプカー博士によって編集された『ギムナジウム向けの古典古代事典』 *Reallexikon des classischen Alterthums für Gymnasien* (ライプツィヒ, 1851年), 大八つ折り版[M・エアラーによる第五版, 1877年]。

わたしは従来なされた体系的試みの性格と計画をまず考察した。真つ先に主要なものとして考察の対象になるのは、その理解が文献学の発展にとって決定的なものとなっている、フリードリヒ・アウグスト・ヴォルフである。われわれは業績が部分的には非常に貧弱である弟子たちには関わらず、師自身にのみ立ち帰る。先に挙げた書物、つまり『古典古代学の博物館』 *Museum der Alterthumswissenschaft* において、彼はみずからの見解を一般的に議論し、同時にその末尾で古典古代学のすべての部分の展望を与えた。これらの部分の配置と連関は、まさにそれを通して学問が一つの全体へと形成されなければならないがゆえに、エンチクロペディーの建設において本質的なものである。われわれはそれゆえ、われわれがどの程度ヴォルフに与することができるのかを検証するために、より詳しくこれを論じなければならない。彼の計画に従えば、古典古代学は24の主要部分を含んでいる。

I. 古典古代人の哲学的言語論。二つの古典古代言語の原則。II. ギリシア語の文法。III. ラテン語の文法。IV. 文献学的解釈技法の原則。V. 批判と改訂技法。VI. 散文と韻文の作文の原則, ないし文体と韻律論の理論。

VII. ギリシア人とローマ人の地理学と天体学。VIII. 古代の普遍史。IX. 古典古代の年代誌と歴史批判の原則。X. ギリシアの古美術品。XI. ローマの古美術品。XII. 神話。

XIII. ギリシア人の文学史(文学の外的な歴史)。XIV. ローマ人の文学史(文学の外的な歴史)。XV. ギリシア人の弁論術と学問の歴史。XVI. ローマ人の弁論術と学問の歴史。XVII. 両国民の模倣術についての歴史的注釈。

XVIII. 芸術ならびに技術の考古学への手ほどき, ないし古典古代人の絵画と芸術作品への注釈。XIX. 考古学的芸術論ないし古典古代の描写芸術ならびに造形芸術の原則。XX. 古典古代の一般的芸術史。XXI. 古典古代の建築術の知識と歴史への手ほどき。XXII. ギリシア人とローマ人の古銭学。XXIII. 金石学。

XXIV. ギリシアならびにラテンの文献学と爾余の古典古代学の文学史と文献目録。

ヴォルフは、実際に与えられているようないろいろな学問分野を、心地よく思われる配置に従って、一つの花輪に編んだのであった。わたしはいまこれについての判断を述べるが、それによってヴォルフについてではなく、支配的な見解についての判断を述べるものである。なぜなら、これが支配的な見解であるということは、たとえ個々の点では彼の編成から逸脱しようとも、ひとがそれをもってその展望を甘受してき、今日でもなおこの分野におけるヴォルフの業績に対して抱くところの、驚嘆を示しているからである。編成されている内容が、実際に学問分野であるのかどうか、個々の内容が一定の概念的統一を有しているのかどうか、最後に、それらが実際にも文献学という共通概念に属するのかどうかということは、批判の俎上に載せて考量されなければならない。しかし編成されている個々の学問分野にも、それらが構成すべき全体にも、学問的な連関が欠けている。もしヘーゲルが文献学を寄せ集め(Aggregat)だと説明するのであれば²²,

²² ヘーゲルは、文献学を単なる「知識の寄せ集め」(Aggregat von Kenntnissen)と見なし、それを自立した学問分野(Disziplin)とは認めなかった。Georg W. F. Hegel: “Einleitung zur 1. Aufl. der Enzyklopädie der philosophischen

この判断はヴォルフの叙述に基づいているように思われる。ヴォルフは文献学を、「ギリシア人とローマ人の行動と運命、政治的、学術的、家政的狀態、その文化、言語、芸術と学問、習俗、宗教、国民的性格と思惟方法をわれわれに知らしめ、かくしてわれわれが、彼らからわれわれへと伝えられた作品を根本的に理解し、その内容と精神への洞察をもちつつ、古代の生活を現前に思い浮かべ、それを後代ならびに現代の生活と比較しながら享受するのが巧みになるところの、知識と報告の総体」(30頁)と記している。彼はいろいろな学問分野をまず共通概念において指し示し、導き出し、構成する代わりに、それを出来上がったものとして仮定している。ここには諸概念を形づくる上での完全な無能さ——文献学者においては異例ではないが——が示されている。もちろん24の部分の配置のなかに一定の計画があることを見誤ることはできない。それらはヴォルフ自身によってグループにまとめられる。第一グループI-VIは、オルガノン²³ないし一般的部分であり、もっともらしく整理されているが、しかし欠陥がないわけではない。とくにNo.VIはあまりにも漠然としている。韻律論それ自体は、音楽でいう作曲法に相当する言語的教説の一部にほかならない。散文的構成は、一部は文法学の継続にすぎず、しかし別の部分は論理学、修辞学、あるいは詩学であり、そしてこれはふたたび美学に属している。それゆえ、

Wissenschaften,“ *Hegel Jubiläumsausgabe*, Bd. 6 (Stuttgart, 1968), § 10. S. 27.

²³「オルガノン」とは、一般的には、「機関」ないし「道具」を意味するが、アリストテレスの後継者は論理学を哲学の一部門ではなく道具であると見なし、論理学をこの名で呼んだ。そこから、オルガノンはアリストテレスの論理学の諸著作を総括する名称となった。ところで、その場合の「道具」とはどういう意味かといえ、例えば大工が用いる物差しや墨縄のようなものである。鋸や鉋などは木材を直接切ったり削ったりする道具であるが、これに対して、物差しや墨縄は鋸や鉋を有効に使うための、線引き作業の道具である。論理学もそれに似て、学問探究や哲学的議論のための道具の、そのまた道具のようなものだという。

ここには明確な学問的配置は存在しない。さらに構成の原則が整うのが遅すぎる。構成の原則は文法学の直後に設定されるべきであり、それは文法学を拡大したものにすぎない。しかし解釈と批判の原則(IVとV)は、両者とは本質的に異なっている。解釈と批判の原則は、対象についての単なる反省に関係しているが、これに対して構成の原則ならびに文法学は、書物そのものの基礎となっているからである。第一グループはそれゆえ経験的所与に関して、偶然性と外的快適さに従って配置されている。No.VII-XIIは第二のパートを形づくる。これは文学、芸術ならびに学問に関連した歴史を含んでいるが、しかし現実的な連関を欠いている。地理学(VII)は、土地を知るようになるためには、もちろん歴史に先んじていよう。しかし天体学は何をなすべきであろうか。だが、歴史の基礎としての古代の地理学は、客観的に存在していた通りに、与えられなければならない。すなわち、土地が書き記されなければならないのである。しかし古典古代人が地理学について考えたことは、ここには属しておらず、むしろヴォルフがNo.XVとXVIではじめて引証しているところの、学問の歴史に属している。これと結びついているのがまた天体学であるが、これは明らかに地理学に並置されているにすぎない。なぜなら、ヴォルフはこれを主観的な意味で古典古代人の学問として、われわれの洞察によればそうであったような、国についての客観的な叙述からはっきり区別しなかったからである。このような混乱にきっかけを与えたのは、とくに人々が従来過度の重きを置いた、いわゆるホメロスのな地理学と神話的な天体論である。しかしこれらは神話と学問の歴史とに属する。この両者は、ヴォルフでは四つの番号にバラされて存在しているが、それにもかかわらず非常に親近的である。No.VIIIの「古代の普遍史」に続くのは、年代誌と歴史批判である。だが、前者すなわち歴史の時間的なオルガノンは、空間的なオルガノンとしての地理学に属する。歴史批判は批判一般と落ち合うので、とくに挙げられることはなかった。しかしいずれにせよ、それは歴史以前の、それどころか地理学と年代誌以前の単なるオルガノンとして立てられなければならない。なぜなら、これらのものは実質的な性格をもったものだからである。

ギリシアとローマの古美術品と両国民の神話がこれに続く。ここにはどこにも連関がない。古美術品の概念はまったく無効であるということ、その概念は実在性も、限界性も、最低限の規定性ももたないということ、のちほど証明しようと思う。なぜかといえば、古美術品は文学からも、政治史からも、神話からも、あるいは芸術と学問の歴史からも、本質的に区別されていないからである。学問的な計画にとっては、古美術品は完全に排除されなければならないか、あるいは文献学の実質的部分全体を占めるような広がりを持しなければならない。神話もヴォルフにおいてはまったく孤立している。一部にはそれは祭儀としての宗教の歴史であり、したがって異なった仕方でそれに属しているし、一部には学問、それも国民の原始的学問であり、したがって No.XV と XVI に属する。第三グループの XIII-XVII には、弁論術と諸学問が入り交じって編み込まれている。しかし後者は、あらゆる技術ひっくるめてと同じくらいに種々さまざまであるので、ある程度区別されなければならない。すべての学問に関わるのが哲学であるが、それゆえこれは上位に位置し、個々の学問はその下に位置すべきであろう。次に芸術の歴史と、いまやあらゆる個々の芸術が続かなければならない。したがって、ここに最大の紛糾がある。弁論術の歴史は単に言語で表現された美的形式の歴史、つまり文学史である。それと併走する「外的」な文学史などは決して文学史ではない。模倣的芸術についての歴史的注釈 (XVII) は、ヴォルフの規定に従えば (65 頁)、弁論術と造形芸術との中間に位置する諸々の芸術、すなわち音楽、朗読、舞踊²⁴、演劇、

²⁴ ここに「舞踊」と訳出した Orchestik は、ギリシア語の ὄρχησις [踊り] に由来し、Tanzkunst (1. 舞踊芸術 2. 舞踊の技術) を意味する (cf. J. G. Krünitz, *Oeconomische Encyclopädie* [Berlin: Pauli, 1773-1858], Tl. 179, S. 631ff.)。プラトンはしばしば「歌 (ὦδή, μέλος) と踊り」を対にして語り、例えば『法律』VII, 803E では「歌と踊りを楽しみながら生きるのが、神の玩具としての人間の正しい生き方」と述べている。また「歌舞は踊りと歌からなる」(『法律』II 654B) とあるように、両者をいわば統合したものが「歌舞」(χορεία) である。いずれにせよ、古来より Musik (音楽) と Orchestik (舞踊) は密接

についての若干の暗示を含んでいる。さて、第四グループの No.XVIII-XXIII は造形芸術の歴史を含む。ここで最初に入り込んでいる記念碑についての注釈(XVIII)は、それ自体としては単なる素材であって、決して学問分野をなすものではない。そして考古学的な芸術論(XIX)は、オルガノンとして前面に立たなければならないが、その場合にはそれは美学に属しているという。しかしながら、美学はそれ自体としては哲学的であり、そして歴史的に把握されるときにのみ、歴史的現象における芸術理念の証明として文献学的である。そして古典古代の芸術の一般的な歴史(XX)と、その次にふたたび特殊なものに舞い戻って(XXI-XXIII)、建築術の歴史、古銭学、そして金石学が続く。かくして特殊な芸術史からは、彫刻や絵画などの歴史が欠落しているが、これらの歴史は考古学的な芸術論のなかには登場することができないものである。古銭学の対象となる銘文は同様に文学的であり、そして硬貨そのものは、一部は単にテクネー・バナウソス(τέχνη βαναισος)〔手先の技術、職人わざ〕であり、一部は単に貨幣として、そして最終的に単に造形美術として考察されるべきものである。したがって、それは完全には造形芸術の歴史には属していない。これらのなかで造形芸術の歴史に属するものは、例えば宝石彫磨術ほどの大きな分野を持ち得ない。けれども、ひとは学問をその素材に従って、刻印された金属片の学と定義しようとは思わない。最後に、金石学は、それが書物に関係する限り、ならびに書物の考古学全体ないし古文書を扱う古文書学に関係する限り、本来的には文学史の一部である。芸術のモニュメントに関しては、それは金石学の対象ではない。No.XXIV は最初であり、また文献学についての省察として最後でもあり、かかるものとしていわば文献学の文献学である。われわれの批判を総括するとすれば、この最も有名な文献学者がいかにしてこのように書くことができたのか、そしていかにしてひ

に結びついているが、ペークはみずからの文献学の体系において、「体操術」(Gymnastik)をさらに加えて、この三つのを「運動的美術」(Künste der Bewegung)と見なしている。

とはいまなおそれを賛美することができるのか、ほとんど理解できない。物理学者はこの分類ではさらに先に進んでいる。けれども、この分類の何が問題なのだろうか。わたし自身は通常はこの手の単なる概念的なるものをあまり評価しないが、しかしここでは明らかにそれが問題となっている。なぜなら、文献学は古典古代全体の認識を与えるべきだからである。しかし、もしひとがあるときは研究の諸オルガノンを実質的な部分と混同し、またあるときは事柄についてのわれわれの学問と古典古代人のそれとを混同し、しかるのちただ単に偶然が、あれこれの文献学者において、あれこれの点の発展を促進させたとか、あるいは阻害したという理由で、ふたたび非本質的な点を非常に強調し、他の本質的な点を抑圧するとすれば、古典古代を明確に眺めることがいかにして可能であろうか。厳密な学問的手続きによって見出された本質的な点は、際立たせなければならぬし、また一般的なものと特殊なものとの統一が、そして一般的なもののなかにある特殊なものとの生命が、つねに明確になるような仕方、叙述されなければならない。学問はそのようにしてのみ構成されることができるが、これこそヴォルフ的な叙述によっては生じない当のものである。エンチクロペディーについてのヴォルフの書物は、学問を実際に熟知している人、文献学的技法における達人、そして才氣溢れる人物を指し示している。但し、学問の建設にとっては、それを快く認めることはできない。

次に、アスト的な見方を検証してみよう。アストはより学問的な性向をもって物事を始める。彼は理論的な文献学と実践的な文献学とを区別し、後者を自由な人間形成のための研究としている。この区別は——われわれがすでに見たように——それ自体として根拠のあることであるが、しかしわれわれの学問的叙述には属さないし、また排他的な対立をなすものでもない。理論的な文献学を彼は四つの部分に分けている。すなわち、1) 政治史、2) 古典古代学、3) 詩的領域あるいは神話とすべての芸術、4) 諸学問と哲学である。何がこの区分に関して正しいかは、われわれの探究の経過が示すであろう。われわれはこのような古典古代の美術品に対する立場に暫定的に反対の意を表明する。上述したように、われわれはこのよ

うな立場を明確なものとして、政治史から区別されたものとして決して認めることができないからである。ちなみにアストは、好ましからぬ無味乾燥な形式主義によって、彼の本の有用性を曇らせてしまった。彼は解釈学と批判のほかに、文法を文献学のオルガノンに数えている。哲学におけるオルガノンは論理学、つまり哲学的機能に関する教理である。だが、文献学者にとって文法は同様のものなのだろうか。

ベルンハルディーは、エンチクロペディーにおいて文献学の要素とオルガノンとを区別するが、その区別は奇妙である。彼において第一の部分を形づくっている要素は、解釈学と批判である。第二の部分たるオルガノンは文法である。第三の部分を形づくっているのは現実的諸科学であり、しかも a) 文学史、b) 地理学、c) 年代誌と古典古代美術品を伴う歴史、d) 神話である。第四の、そして最後の部分としては、彼は文献学の「付けたり」を挙げている。すなわち、a) 芸術史と古銭学ならびに金石学、そして b) 文献学の歴史である。ここには確固たる体系、概念的な区別は全然存在しない。なぜ哲学史は排除され、地理学は排除されないのであろうか。とくに奇異なのは現実的諸科学と付けたりの区別である。その区別は広く流布している見方に基づいており、それによれば芸術の考古学は本来的には文献学には属さない。しかしだからこそ、ここで文献学の歴史すらも併記されているのである。

マッティアエは彼のエンチクロペディーにおいて、解釈学と批判を文献学の目的として立てている。爾余のすべては単に手段として仕えるものであり、そしてこの手段は彼にとって言語学と考古学である。解釈学と批判は実践的な部分を形づくり、手段の総体は理論的な部分を形づくる。これ以上の概念の錯綜はほとんど達成され得ない。素材は単に形式的な活動によって究明されるものであるが、その活動の基礎づけは、たしかに実践的な、すなわち実行的な活動についての理論である。しかしそれは文献学の実践をなすものではない。文献学の実践をなすものは、文献学を教育などに応用するところに存している。そしてこれを実行することは目的でもあり得ず、むしろ目的は認識がそれへと赴くところの、探し当てられるべき

ものである。しかし手段の概念を理論的な部分として表示することは、さらに奇異である。手段としては、それは他の学問分野から構成されている^{レシマ}題目にすぎないであろう。だがひとはいかにしてそのような題目を学問分野の理論と見なすことができるであろうか。学問分野はそれ自体のうちにみずからその理論をもっていなければならない。明らかに事態はまさに逆転させられるべきである。解釈学と批判が形式的活動であり、そしてこの活動はマッティアエが手段と名づけるものに対する手段である。それは目的であり、かつ実質的なものである。だが両者は理論的である。実践的なものとは、理論がそれに適用されるところの、第三のものである。それ以外の点では、マッティアエは彼の見方を基礎づけておらず、むしろそれを提示することで満足している。

さて、わたし自身の体系を叙述する前に、わたしとしてはエンチクロペディーから二つのものを分離しておかなければならない。これは通常はエンチクロペディーと混同されているもので、すなわち方法論 (Methodologie) と文献目録 (Bibliographie) である。

IV. エンチクロペディーと方法論の関係

§ 9. もしエンチクロペディーそれ自体を方法論 (Methodik)²⁵ と見なそ

²⁵ ここでは Methodologie と Methodik を区別せずに、どちらも「方法論」と訳したが、厳密に言えば、若干のニュアンスの相違がある。Methodik の方はギリシア語の μεθοδική (τέχνη) に由来し、原義は「計画的な処置の技術」(Kunst des planmäßigen Vorgehens) というほどの意味である。そこからこの語は、1. “Wissenschaft von der Verfahrensweise einer Wissenschaft”, 2. “Wissenschaft von den Kehr- u. Unterrichtsmethoden”, 3. “festgelegte Art des Vorgehens” という意味になる。これに対して Methodologie は μέθοδος と λόγος の合成語で、“Lehre, Theorie der wissenschaftlichen Methoden” という意味を表す。Das großen Wörterbuch der deutschen Sprache in 8 Bänden, Bd. 5 (Mannheim: Dudenverlag, 1994), S. 2253.

うとすれば、とんでもない思い違いであろう。エンクロペディーは純理論的な学問的目的をもっており、方法論は別の目的をもっている。すなわち、いかにして理論を獲得しなければならないかを教示することである。エンクロペディーは学問の連関を示す。それは大まかなタッチと筆遣いで全体を描く。しかし一つの学問を学ぼうとする人は、ただちに全体へと辿り着くことはできない。エンクロペディーはまた、例えばひとがその学問分野をエンクロペディッシュな秩序に従って学ぶということによって、方法論の代わりをすることはできない。万が一このようなことが可能であるとしても、それは目的に反したことであろう。エンクロペディーは最も普遍的〔一般的〕な概念から出発する。学生はそこから出発することはできず、むしろ正反対の歩みをしなければならない。エンクロペディーは普遍的なものから導出し説明するのに対して、学生は真っ先に個別的なものを理念の基礎ならびに素材として知るようにならなければならない。そして単に生かじりの知識を身につけようとするのではなく、本当に自分自身で学問を身につけようとするのであれば、学生はここからはじめて普遍的なものへと上昇することができるのである。このことは文献学概念から生じている。なぜなら、歴史的研究においては、普遍的なものは結果であるべきだからである。しかしエンクロペディーはさっそこの結果を与える。

まずもって学問の展望を、つまりエンクロペディーを自分のものとし、そののちに徐々に特殊なものへと下っていきと欲する人は、決して健全かつ正確な認識には到達せず、むしろ意識が拡散し、多くの事柄についてあまり知らないということになるであろう。シェリングは学術的研究の方法論において、きわめて正しく次のように述べている。すなわち、歴史の研究において普遍史的展望から出発することは、最も役に立たないし破滅的なことである、なぜかといえば、そこにはただいろいろな専門があるだけで、価値のあるものは何もないからである、と。彼は歴史学においてはまず一つの期間を正確に学び、そしてここから徐々にあらゆる方向へと広げていくことを提案している。それと似た歩みは、最も一般的意味にお

いて、たしかに歴史学と落ち合う文献学にとって、方法的にいて唯一正しいものである。学問においてはあらゆることは似通っている。学問そのものは無限であるが、それにもかかわらず、学問の体系全体は同調し合い対応し合っている。好きな方向に位置を取ってもよいが、但し、重要なものないし価値あるものを選ぶとしたら、完全な理解に到達するためには、ひとはこの出発点からあらゆる方向へと広がらなければならない。ひとは各々のものから全体へと駆り立てられる。その際、正しく物事を始め、力と精神と熱意を持ち合わせることのみが重要である。そのような出発点の様々なものを選び、そこから全体へと突き抜けようと尽力すれば、それだけたしかにこの全体を把握し、同時にそれだけ豊かに沢山の個々のものを理解するであろう。したがって、個々のものに深く沈潜することによって、ひとは一面的になる危険性を最も容易に回避できる。それはいろいろな学問分野を次々と結び合わせることで、それぞれの専門における探究がふたたび多くの他の探究へと滲入するからである。これに対して、あらゆる専門分野における最も普遍的な成果を摘みとることによって、最初からエンチクロペディッシュな多面性のみを得ようと努めると、一つのものから他のものへとすばやく飛び移り、何一つ根本的に知るようにならないのが常である。

オランダの偉大な文献学者たちは、古典古代全体を年代順に学ぶ前に書くので、ひとはさながら街道を旅して回っているようで、毎日一定数の距離を進むが、これはわずかのことしか教えない旅の仕方である。オランダ人が実際にも外的に収集してきただけだったように、このような直線的なやり方は事物の本質へと導かない。唯一正しい方法は循環的な方法であり、その方法においてひとはすべてのことを一つの点に遡源して関係づけ、この点からあらゆる側に向かって周辺へと移る。これによってひとは着手するすべてのことを、しっかりと真剣に着手する技能を獲得する。ひとは対象により長く留まるので、より良く判断を行使する。ひとは一般的な研究をする場合よりも、より多くの名人芸を獲得する。そのような一般的な研究をすると、それによって他方でふたたび、あたかも多くを知っているか

のような思いや、非常に不幸なもの好き (πολυπραγμοσύνη)²⁶ が促進される。

しかしエンクロペディーと方法論はまったく異なっているが、それにもかかわらず、両者を結合することは非常に良いことである。なぜなら、まずわれわれは個々のものを学ぶ方法を、あたかも他のものに心を煩わせずに最上のものを企てることができる、といった意味で賞賛したのではないからである。こんなことをすれば実際には、早期に追放しなければならない、ひどく嫌な一面性が生ずることになろう。なぜなら、そのような一面性はいとも容易に定着し、そこから各自が自分の専門分野を最高のものとし、他のすべてのものを価値のないものと見なす、例の自己についての過大評価が生ずるからである。ひとはそれゆえ、エンクロペディーが与える展望を、特殊で厳密な研究を矯正するものとして利用しなければならない。ひとはエンクロペディーを、特殊で厳密な研究との関連において、そしてそれと並んで、自分のものとするからである。エンクロペディー自体はこれに対して方法的な指導を与えなければならない。

ちなみに、エンクロペディーは、ひとが個々に捉えるものの普遍的な学問的連関を見出すことを教えるので、それはまた学問研究者を刺激して、さもなければ嫌悪感を催させるような、個別的なものへとさらに前進するよう仕向ける。なぜなら、連関は精神が欲求するものだからである。多くの人はそのことを意識せずに文献学を営んでいる。もし彼らが自分たちの

²⁶ A *Greek-English Lexicon*, compiled by H. G. Liddell and R. Scott, revised by H. S. Jones (Oxford: Oxford University Press, 1990) によれば、この語は πολυπραγμονέω〔1. あれこれと忙しくする。2. お節介をやく、干渉する。3. ものを知りたがる、詮索好き。〕という動詞から派生した名詞で、第一義的には“curiosity, officiousness, meddlesomeness” という意味であるが、のちに“search after knowledge” という意味も表すようになったと記されている。ここでは前後の文脈から容易にわかるように、否定的な意味がきわめて濃厚なので、学問的探究へとつながる好奇心とは区別して、余計なことにあれこれと手を出す「もの好き」という意に解した。

やっていることを意識するようになれば、頭が良ければその研究を投げ捨てることだろう。なぜなら、彼らは自分たちが行っている仕事にいかなる基礎も、いかなる連関も見出さないであろうから。文献学は、あらゆることが一つの理念によって貫き通されているために、学問的に形成されなければならない。そうでなければ、それは長期的な満足を保証できない。わたし自身は高次の見解を見出すまでは、しばしば頭が混乱していた。突っ込んだ特殊の研究に基づいて、全体の連関についての意識が獲得されれば、そのときエンチクロペディッシュな展望についての完全な理解は、文献学的研究の精華になるであろう。しかし同時にそのような展望によって、ひとはとくに究明しようとしている当のものを、研究期間中に、より大きな確かさをもって選り出せる立場に身を置くであろう。

こういう次第で、もしエンチクロペディッシュな研究が特殊の研究と並んで行かなければならぬとすれば、方法論の原則を挙げる場所としては、[文献学の]実践そのものを除けば、エンチクロペディーほどふさわしい場所は存在しない。エンチクロペディーの形式的部分は完全に方法的である——その部分は文献学的研究そのものの方法を教える。——学問を自分のものにする方法を教えるべき方法論は、それに続いて諸々の規定をそれに連結させなければならない。したがって、そこに含まれている学問分野を、早い時期にあるいは遅い時期に学ばなければならないのかどうか、さらにはそれをいかにして、またいかなる補助手段を用いて学ばなければならないのかは、それぞれの節で付言するのが最も良いであろう。そのようにエンチクロペディーと結合されることによるのみ、方法論は学問的に基礎づけられる。ひとはどのようにして、できるだけ容易にかつ根本的に、それを自分のものとしてきたのかということを、同時に認識することによって、学問とは理論的にいかなるものであるのかについて、一つの表象を得るのである。*

* ベルリン講義目録への以下のプロイミオン (『小品集』第四巻) を参照され

V. 全研究の資料と補助手段について — 文献目録

§ 10. エンチクロペディーは学問の体系を作り上げ、方法論はいろいろな部分を学ぶ学び方を述べる。しかし研究は資料に基づく研究である。資料は古典古代から存在しているすべてのもののうちに存している。それゆえ、言語、慣習、政治制度という生ける伝統以外に、いろいろな造形芸術作品や産業作品のうちに、そして大量の保存されている書物の全体のうちに存している。文献学という名称がすでに暗示しているように、主たる資料は大量の保存されている書物である。残存している芸術品についての知識は、一部は自分の直観によって、一部は模倣品によって、また博物館展示物分類学や考古学的地理学や地形学に基づいて獲得されなければならない。したがってここでも、他の資料の場合に負けず劣らず、ふたたび文書の認識が考察の対象となる。さて、資料についての知識は方法論のなかにもエンチクロペディーのなかにも直接的には含まれていない。前者は諸規則を含み、後者は諸原則を含む。フリードリヒ・アウグスト・ヴォルフは、問題の知識の主要部分たる文書的情報を、彼の草案のなかの No. XXIV において、特別な学問分野として挙げている。といっても、それは決して学問分野ではなく、資料についての全知識と同様、個々の学問分野にとっての必然的前提にすぎない。文献目録は一般的には明らかに学問ではなく、学問に対する文書資料を指し示すものにすぎない。ひとはたしかにそれを図書館学として、あるいは図書館学の一分枝として、表示してきた。しかしながら、図書館学は文書保管学と同じくらい存在しない。なぜなら、両者には首尾一貫した理念が欠けているからである。

それゆえ、文献目録は学問の外にある研究の補助手段としてのみ見なす

たい。1835年の「研究方法の正しい論拠について」De recta atrium studiorum ratione (400頁以下)、1836年の「精神が研究方法に過度に引き裂かれぬように用心すべしということ」Cavendum esse ne in atrium studiis nimium distrahatur animus (413頁以下)、1839/40年の「研究を策定する上での選択について」De delectu in studiis instituendo (471頁以下)。

ことができる。文献目録がエンチクロペディーにおいて考慮されるべきかどうかはわからない。学問的と称する少なからぬ叙述は、書物の表題以外の何物からも成り立っていないし、他の叙述に置いては資料が挙げられることすらない。一番目の種類のエンチクロペディーは必然的にその本来の目的を果たさない。これに対して、別の種類のエンチクロペディーは素晴らしい概念展開を含み、真に精神的な教化を保證することができる。しかしそれは学問においてすでになされていることを、そこから十分に見てとれないという欠点をもっている。それゆえ、研究の現状を表示するためには、エンチクロペディーの各節において、文献目録を付加することが目的に適っている。このことは方法論的理由からも同時に必要である。なぜなら、いかにして学問を自分のものにしたかを述べるためには、ひとは資料と補助手段にも注意を向けなければならないからである²⁷。

VI. われわれの計画の草案

§ 11. 文献学の学問的構築が成就すべきであるとすれば、文献学のいろいろな部分と、よってもって発展の全行程は、概念から生じて来なければならないが、このことは前の箇所ですでにしばしば述べたところである。通常立てられ、また偶然的に形成されたような学問分野は、それらが実際に学問分野であり、概念を欠いた単なる寄せ集めではないかぎりにおいてのみ、そのような導出作業においてみずからの位置を主張することができる。われわれによって提起された概念に従えば、文献学は認識されたものの認識 (die Erkenntniss des Erkannten)、すなわち所与の認識の再認識である。認識されたものを再認識することは、しかしそれを理解すること (verstehen) を意味する。ちょうど哲学が論理学、弁証法、あるいは — エ

²⁷ 原典では、このあとに約2頁半にわたって、詳しい文献解題が載っているが、ここでは割愛する。その理由は、一つには紙幅の制約ということがあるが、もう一つはここで紹介されている文献は、すでにすっかり古びており、現代のわれわれにはもはや近づき得ないものも少なくないからである。

ピクロス主義者がそれを呼んだように——基準学(Kanonik)²⁸において、認識するという行為そのものと認識活動の諸契機を考察するように、文献学も理解する(Verstehen)という行為と理解(Verständniss)の諸契機を学問的に探究しなければならない。そこから成立する理論、つまり解釈学的なオルガノン²⁹は、一般的な論理学を前提しているが、しかしそれは論理学からは自立した、その特殊な一分枝である。そのほかに、分献学的活動から生じて来るのは、理解の産物たる内容である。つまり哲学において、哲学的認識の内容を詳述する現実的諸学科が、論理学に向かい合って立っているように、理解されたものを考察することである。それによって、文献学の概念から必然的に二つの主要部分が生ずるが、この二つの部分で文献学は完全に汲み尽くされる。第一の部分は形式的(formal)である。なぜなら、文献学の形式はその本来的行為ないしその機能を叙述することだからである。他の部分は実質的(material)である。なぜなら、それは学問によって形成された全素材(Stoff)を含んでいるからである。もしわれわれが、これらの主要部分をふたたび概念そのものからさらに分割すれば、われわれは何らかのさらなる添加物なしに、つまり外から何かを付け足したり、何かを抜き取ったりすることなく、この概念の内容全体を見出すであろう。もし他の何らかの定義からではなく、この定義だけからいろいろな部分を、つまり形式的な主要部分が叙述する諸活動を、完全に導き出せるのであれば、それはわれわれの第一の定義の正しさにとっての確かな検証になるであろう。さて、これら二つの主要部分の各々のさらなる区分へと移る前に、われわれはまず両者の相違と相互関係をより厳密に論究しようと思う。

²⁸「基準学」(Kanonik)は、ギリシア語の“κανών”に由来するが、ギリシア語のカノンの原義は「真っ直ぐな棒」であり、そこから基準、規範、規則といった意味が派生してくる。バークがここで述べているように、エブクロスと彼の学派は論理学を「基準学」(Kanonik)と名づけた。

§ 12. 形式的部分¹⁾は、理念に従って最初からその産物として存在するところの、文献学的活動を考察する。それゆえ、叙述においてはこの部分が先行しなければならない。その実行においては、形式的機能の優位性はそれほど反論されていないわけではない。理解の大抵の契機にとっては、すでに多数の所与の産物が前提される。例えば、一つの書物を理解するために、各々の場合に、言語と文学史の知識が、しばしばそれに加えて、さらに歴史学や芸術史の知識などが必要である。そこで非常に頻繁に、それどころかほとんどいたるところで、資料の大きな部分が形式的機能の有効性に対して与えられていなければならない。文献学的な芸術家の課題は、まさにこの見せかけの原理の請求(*petitio principii*)²⁹⁾を、あるいは事柄そのもののうちにある循環を、解決することに存している。したがって、形式的部分に属しているものと、実質的部分に属しているものは、ひとが各々の場合に理解のために用いるものに従って規定されはしない。なぜなら、探し求められるすべてのものは、ふたたび理解のための手段となるからである。わたしはほかならぬ文法に関してこのことに気づく。ひとは理解するために言語を用いるので、文法をオルガノンに数えてきた。しかしこれに関して、あらゆるものをオルガノンに数えることができるということを、ひとは熟慮してこなかった。再認識されるべきものが言語で書き記されている以上、言語そのものを、したがってまたその文法的形式を理解することは、明らかに文献学の課題である。真実の関係は、学問がその課題を根本から解決しなければならないところで、最も明白に現れる。例えば、これはエジプトの文献学においてその通りである。ここには言語はまったく与えられておらず、それはまず見出されなければならない。それゆえ、言語はいかにしてオルガノンに属することができるであろうか。当然のことながら、同様のことは古典的言語においてもまた起こる。但し、それはそれほど目立った仕方で起こらない。なぜなら、ここでは文法的伝承が助け

²⁹⁾「原理の請求」(*petitio principii*)とは、これからはじめて証明されるべき未証明の命題を、証明の根拠として前提する誤りのこと。

船を出すからである。とはいえ、事態は何も変わりはない。言語的なものはみずから考察の対象である。文法はまずは文献学的活動の産物であり、それゆえ形式的部分には属さない。古典古代の諸言語は、文献学によって再構成されるべき、古典古代の産物である。それは古典古代における認識されるべき民族そのもののうちに存しており、したがって文献学者にとって、彼らの活動の材料である。もちろん、言語は他のものと比較すればより形式的な要素である。しかし形式的というのは、対象にとってであって、考察者の主観的活動にとってではない。後者のみが文献学の形式的部分において叙述されるのであり、古典古代においてみずから認識の形式であるところのものが叙述されるのではない。その広がり全体における文法的理解の理論と、また言語自体の理解の理論のみが、オルガノンに数えられるべきである。同時に、文献学者はより多く現実に関わるべきか、それとも言語に関わるべきかといった論争は、これによって調停されている。言語は、文献学が考察しなければならない事柄に、みずからともに属している。そして文献学者によって再構成されつつ、事柄として認識されなければならない。それによって文法は文献学の実質的部分の系列に入る。*

§ 13. 根本的概念がそのようにして、従来の体系的試みにおいてなされていたよりも、より明確に選別されたのち、われわれは二つの主要部分をさらに区分する作業へと進む。われわれは形式的部分でもって始める。この部分は形式的機能の諸契機に従ってのみ区分され得る。それは理解の理論を含んでいる。しかし理解は一方では絶対的であり、他方では相対的である。すなわち、ひとは各々の対象を一方ではそれ自体として、他方では他との関係において理解しなければならない。後者は個と全体の関係、あ

* この思想はゴットフリート・ヘルマンに反対して、「アテナイ人の会計検査委員と執務審査官について」(Ueber die Logisten und Euthynen der Athener)の論文の序文において、論争的にさらに仕上げられている。『小品集』第七巻、264頁以下。

るいは他の個との関係を確定することを通して、あるいは理想との関係を通してなされる、一つの判断を媒介として行われる。絶対的理解を扱うのは解釈学 (Hermeneutik) であり、相対的理解を扱うのは批判 (Kritik) である。あらゆる種類の解釈、つまり文法的解釈、論理的解釈、歴史的解釈、美的解釈と、あらゆる種類の批判、つまり高等批判、下等批判などは、この中に含まれている。そしてここで最も完全な列挙がなされる。なぜなら、[文献学の]概念に従えば、文献学のすべての形式的なものがこの二つの部分によって包含されないことは、絶対に不可能だからである。絶対的なものと相対的なものの対立は、理解の概念そのものから生じているし、文法的なもの、論理的なもの、等々の差異は、素材的な諸関係から生じている。しかしもし理解の一般的な相違が問題であるならば、ひとは対象の相違においてではなく、理解そのものにおいてそれを証明しなければならない。

解釈学と批判は、当然のことながら、理解の諸原則を発展させるだけである。それを実行し実現するのは文献学的技法である。

文献学の実質的部分は、形式的活動によって突きとめられた、認識されたものの認識を含んでいる。認識されたものがきわめて多様であるように、文献学の対象も、したがってこの部分の節も、きわめて多様である。だがしかし、上述したように、一つの民族の認識は単にその言語や文学のなかに保管されているのではない。そうではなく、一つの民族の、身体的ならざる倫理的ならびに精神的な全活動は、一定の認識の一つの表現である。あらゆるものにおいて、表象あるいは理念がはっきりと現れている。なるほど概念的にはないが、しかし感覚的直観に埋め込まれた仕方で、芸術が理念を表現しているということは、明白である。それゆえ、ここにも一つの認識と芸術家の精神によって認識されたものが存在している。そしてこの認識されたものは、文献学的・歴史的な考察、芸術の解説、芸術史において再認識される。同様のことは、国家生活と家族生活にもあてはまる。実践的生活のこれら二つの側面の配置においても、いたるところで各民族の内的本質、表象、それゆえ認識が発展されている。家族の理念は、

各民族において、家族の歴史的発展のうちに特有の仕方では表現される。そして国家の発展において、民族のあらゆる実践的理念が実現されたかたちで現れる。家族生活と公共生活において理念がどのようにして実現されているのか、したがってそこにもまた認識が潜んでいる。そして民族は、その実現におけるこの理念そのものを、大なり小なりの意識をもって、民族によって認識されたものだと言ってきた。当然のことながら、あらゆる理念は学問と言語において最も明白に自覚された仕方では表現されている。そうだとすれば、あらゆる精神生活と行為は認識されたものの領域を形づくる。したがって、文献学は各民族において、その精神的発展全体、その文化の歴史を、そのあらゆる方向にわたって叙述しなければならない。これらすべての方向のうちにロゴス(λόγος)が含まれているが、実際の色合いにおけるこのロゴスは、すでに文献学の対象である。教養ある民族においても、ロゴス自身が、すなわち自覚的な認識と反省が、あらゆるものの上に広がっているので、これらは二重の関係において文献学的考察の支配下にある。古典古代の文献学はしたがって、認識の素材として、古典古代の歴史的現象全体を含んでいる。同様のことは、実質的部分においても、その全面的な特有性に従って、みずから自身のうちで完結された有機体として認識されるべきである。すなわちその非身体的な生、生成、成長、そして消滅に従ってである。さて、考察に有利に働き、かつ本質的な関係を表現する形式でこれをなすためには、素材が彼らに畏敬の念を起こさせたといえ、ひとはまずそうした非学問的な学者たちによってつくられた、あの恣意的な境界やバリエード——ひとは個々の学問分野に対して、こうした境界やバリエードを、荒っぽく、概念のかけらもないようなやり方ではめ込んできたのである——を悉く取り壊さなければならない。そしてしかるのち、厳密な建築術と弁証法に従って、学問分野を諸概念から主要な点に向かって新たに構築しなければならない。しかしそれによってだけでは、この部分はまだ学問的にはならず、むしろこれらの個別の事柄が悉く統一性のもとで把握されていることによって、はじめて学問的になるのである。あらゆる特殊なものがあるところに含まれているような、共通のものが見出さ

れなければならない。これは哲学者が民族あるいは時代の原理と名づけている当のものである。それは民族の存在全体の最も内的な核である。それは何か他のものではあり得ない。なぜなら、あらゆる他のものは、外から取り入れられたもので、おそらく異質なものである。個別の事柄はこの原理から演繹されるべきではない。そんなことは歴史的な事柄においては不可能である。しかし個別な事柄は一般的な直観から生じてくるべきであり、そしてかかる一般的な直観は、ふたたび個々の部分で実証されなければならない。それは〔いわば〕身体にとっての魂であり、ギリシア人が正当にも魂を名づけているように、一つにまとめ上げ配置する原因として、地上的な素材に浸透している。すなわち、このように魂を吹き込まれることによって、学問はまさに有機的になるのである。したがって、実質的な部分はそのような一般的な直観をもって始まる。そしてそれは、古典古代の文献学においては、古典古代の理念そのもの以外のもではあり得ない。そしてかかる古典古代の理念から、つぎにふたたび両国民の特質が生じる。これが一般的な部分あるいは一般的な古典古代論である。一般的な古典古代論の課題は、もちろん、完全には到達されることのできない理想にすぎない。なぜなら、すべての個別的な事柄を全体的直観へと結びつけることは不可能だからである。しかし少なくとも努力はその方向へと向かわなければならないし、この課題は決して視界から外されてはならない。とはいえ、単なる抽象はここでいう一般的なものであることはできない。そうではなく、個別的なものはあたかも具体的な直観のなかにあるかのように、そのなかに生き生きと潜んでいなければならない。その場合、一般的なものと特殊なものとは、お互いに前提し合い、近似的にお互いを編成する。叙述にとっては、一般的な部分から特殊な部分が、あるいは古典古代の包括的な文化史として、ギリシア人とローマ人についての特殊な古典古代論が生じてくる。実質的部分の二つの節の各々は、方法論的ならびに文献目録的な付加を含む。後者は、一般的な古典古代論においては、古典古代一般の考察に関わるであろう。したがって、それは一般的な文献学の歴史を含むであろう。

あらゆる一般的なものと特殊なものは相互に食い込んでおり、そしてバラバラに引き裂くことはできないので、実質的部分の二つの主要な節の厳密な分離は可能ではなく、むしろつねに一方から他方へのパスがなされる。このことはあの節の細区分にもまたあてはまる。だが、この細区分に対する区分根拠がどこから取られるべきかは、わからない。古典古代の民族の生と行為の全体が実質的部分の対象であり、しかもそれは純粹に身体的ではなく、そのなかに認識を表現している限り、あらゆる関係に及んでいるので、非常に多くの細区分が生じざるを得ないし、あの生と行為について非常に多くの大きな差異を含まざるを得ない。文献学は本来的には、倫理学が普遍性において行為の法則として叙述するところのものを、その実現において、つまり歴史において、叙述するものにほかならないということは、すでにわれわれが見たところである(本書16頁以下³⁰)。したがって、われわれのさらなる全区分の根拠は、倫理学から入手されなければならない。しかしここで、ひとは倫理学を、プラトンの国家におけるように、諸関係をつくり出すものとして考えなければならないのであって、単に徳論や義務論として考えてはならない。したがって、われわれは行為を——国民はそれによってみずからが有するすべてのものを生み出す——創造的かつ形成的な行為と見なすことにしよう。この活動は二重化された活動であり、つまり実践的かつ理論的活動である。実践的な行為は感覺的存在にとって必要な領域を形成するための外的な働きかけである。ここに属しているのは、あらゆるさらなる発展のために、共同体が形成されるということである。最初に家族、その次に段階的に拡大するかたちで、外的ならびに内的に有機的に結ばれた、ますます大きくなる統一、すなわち部族と国家である。実践的な行動はその場合、共同生活の保持と改善のために働きかけることである。この現実的行動に対置されているのは、理想的なものとし

³⁰ 拙訳「アウグスト・ベーク『文献学的な諸学問のエンチクロペディーならびに方法論』——翻訳・註解(その1)——」、『人文論集』第40号(2008年7月)、29頁以下参照。

ての理論的行動である。それは内的な精神的な生産活動に存している。かかる生産活動によって人間は、かしこでは感覚的世界に影響を及ぼすように、ここでは理念世界をおのずから生み出す。かくして、理論的な行動は、内的なものの認識と叙述という欲求から生じ、実践的な行動は、必要なものを満たす欲求と、外的なものを一定の目的に従わせるために、行為へと変換されるところの、意志の力を実現することから生じる。行為の両側面は相互作用のうちに立っている。なぜなら、生はすべての良く配置されたものを配置するところの、ヌース (vous) なしには、したがって理論なしには、配置されないからである。しかし理論は、外的な感覚的現存在の諸条件なしには、思い起こすことができない。たしかに実践的な行動は生の基礎であり、この基礎の上にあらゆる爾余のものは基づいており、この基礎の上に理論的なものは生じるのである。したがって、歴史的な生の実践的側面がまず取り扱われるべきだということになる。それはまず感覚的存在とその保持を包括するが、しかしながらその場合、最初から善の理念へと向かう内的な形成衝動が規定的に作用している。しかし上述したように、ひとは孤立したかたちで行動することはできない。共同体が形成されるか、あるいは前提されなければならない。この共同体は二重化されたものであり得る。すなわち、そこでは人間がどうにかして全体の中で生きる以外には、個がまったく問題とならないかのように、その個性をもって全体に身を委ねる、そのような共同体であるか、それとも、そこでは個性が現れ出て、みずからを全体によって制限せしめるのではなく、まさにこの全体をみずから自身において措定するような、そのような共同体であるのか。かしこでは普遍的なものが、ここでは個的なものが、反対の側を抹消することなく支配している当の概念である。第一の種類の共同体は国家であり、またそこから生じる公共生活である。このなかでは分離して存在している人は誰もいず、各自は全体のうちでのみ生き、各個性は、全体のなかに属すべきであるとすれば、抹消されることなく全体と一体とならなければならない。もう一つの種類は家族とそれに結びついた私的生活である。なぜなら、家族のなかでは個性が支配的であり、家族精神は個人から出発

し、全体は直接的に個人に基づいている。国家においては、特殊なもの
は普遍的なものなかに引き入れられるので、客観性が優勢であり、家族
においては、普遍的なものが特殊なものなかに吸収されるので、主観
性が優勢である。同様の二重性は理論的な生において証明され得る。理論
的な生の最も内的な側面——そのなかでは主体の精神的本性が支配してい
るが——は学問である。学問は神話のなかで宗教的感情の薄暗い表象から
出発し、そして悟性の明晰性へと発展する。祭儀としての宗教とそこから
発展する芸術において、内的な理論的行動は、テオリア (θεωρία) [観想, 観
照]からポイエーシス (ποίησις) [作ること, 創作]が生じることにより、客
観化を通してふたたび外的になる。実践が理論に先行するように、国家生活
も家族生活に先行して、また芸術も学問に先行して論じられなければならない。
なぜなら、客観的なものはつねに主観的なものの土台だからである。*

* 1853年の演説「学問、とりわけ実践的ならびに実証的なものに対するその
関係について」(Ueber die Wissenschaft, insbesondere ihr Verhältniss zum
Praktischen und Positiven) (『小品集』第二巻, 86頁以下)に次のように記
されている。「理論と実践は、ポケットの中の硬貨のように、誰もが容易に口
にする、広く一般的に使われている二つの言葉である。そのような言葉は時
代の経過の中で使い古され、その明瞭な特徴を見分けがつかぬほどに傷つけ
た。そして曖昧な副次的表象がそれにくっついている。かかる副次的表象は、
真の意味を覆い隠し、確固たる概念をもはやそれに結びつけることをほとん
ど許さない。二つの言葉の正しい意義を見出すために、われわれはそれらが
成立した、あるいは押印されたところ、そしてそこからわれわれがそれを受
け継いでいるところ、そこへと立ち返って行かなければならないであろう。
……〔アリストテレスは〕三重の魂の活動を、すなわち理論的あるいは認識的
活動、実践的あるいは作用的活動、詩的あるいは制作的活動を、しかもそれ
ぞれの原理と目的に従って、区別している。理論的活動の原理は彼にとって
認識の対象、つまり主体からは区別された事柄そのものであり、そしてその
目的は認識、定理そのもの、あるいは同一のことであるが、真なるものであ
る。実践的活動はその原理を主体のうちに、主体の意志のうちに有しており、
そしてその目的はなすべきところのもの、仕事を別にした行動、善の実現あ
るいは Eupraxie [訳注：ギリシア語の εὐπραξίς に由来し、「善い行為」ある

以上のことに従えば、古典古代学の特別な部分は、四つの主要部分を含む。その際、ギリシア的なものとローマ的なものはつねに統合され得る。

いは「道徳的に正しい行為」を意味する)である。制作的活動は主体の精神、技術、あるいは能力を基礎とし、作品を目的とする。これに続けて、彼はとくに自然学〔物理学〕はどこに数えられるべきかについて決断し、そしてそれを理論的と言明する。けれども彼はこのように根拠づけた三重性を必ずしもどこでも保持しているわけではなく、むしろわたしには正当と思われるが、しばしば理論的なものと実践的なものの対立で満足している。なぜなら、制作的活動は、それが芸術としてまさに美的なもの形成、すなわち感覚的なものの中に具体化され埋め込まれた理念の形成に関係する限り、理想的な内的ヴィジョンを理論と共有するからであり、そして制作的活動の主要な分枝、とりわけいわゆる詩歌は、認識が用いなければならない当の素材においてすら、つまり言語においてすら表現するからである。そして芸術はまたもや、認識と同一ではないが、そのイメージとしてはそれに非常に似ているところの、内的ヴィジョンを叙述すること以外のいかなる目的も有していない。その結果、芸術のこの部分は行動よりも認識により親近的である。これに対して、爾余の制作的活動は、ほとんど行為と仕事に吸収され、使用目的に役立つので、行動により親近的である。それゆえ、制作的活動全体は理論的活動と実践的活動に区分され得る。しかし後者のこの対立も決して排他的なものではない。なぜなら、認識そのものは意志と意図なしには成立しないし、また財産でもある、それも非常に高価な財産だからである。したがって、理論的活動は実践的活動と絶対に対立するものではない。そして逆に、もし意志が理性的なものであるとすれば、すなわち動物でももっている盲目的衝動とは異なったものであるとすれば、それは認識によって規定される。だからこそ頭脳明晰なプラトンは、理論的なものと実践的なものをあまりバラバラに引き裂かず、徳を認識として表示する。たしかに魂の実践的活動全体は、その活動の目的が善、すなわち、たといそれが、無意識的ではあるが、感情と信仰のうちに与えられているとしても、認識によってのみ完全に把握され得る原理であることによって、理論的活動の下位に位置づけられている。それゆえ、実践的なものそのものは理論の対象になる。そして真なるものと善なるものは矛盾することはできないので、真の理論と真の実践との間の矛盾は不可能である」。1844年の演説「理論的な生と実践的な生との関係」(『小品集』第二巻、325頁以下)参照。

1. 国家生活あるいは公共生活について
2. 家族生活あるいは私的生活について
3. 芸術ならびに外的宗教について
4. 学問ならびに宗教理論あるいは認識としての内的宗教について

宗教は第三ならびに第四の主要部分から完全により分け、そして神話と祭儀は統一して第五部として設定できないかどうかと、ひとはここで言い争うことができるであろう。しかしわたしは宗教が理論的認識ではないということを確信できない。それゆえ、宗教はこの側面から神話として第四節に属する。祭儀を第三節のなかに受け入れたくなければ、少なくともこの代わりに芸術を立たせ、そして祭儀を神話の下位に位置づけなければならないであろう。事実、祭儀は神話と密接に結びついている。祭儀は神話的表象の象徴化に役立つ。けれどもこのことは、芸術と学問は、宗教的なものがそれらの共通の根であることによって、その起源においては重なり合っている、ということを示すにすぎない。なぜなら、学問が神話の進化であるように、芸術は同じように祭儀の進化だからである。当然のことながら、われわれは第三節において、芸術と祭儀を分離したものとして考察する。われわれは祭儀の歴史を冒頭に置く。祭儀はまず祈祷と犠牲において展開される。それに関連して、詩歌、音楽、舞踊が現れる。次に寺院と彫刻円柱において展開される。その中に建築術、彫像、そして絵画がその起源をもっている。そして最後にお祭りと遊びにおいて展開される。そのなかに体操、演劇等々が根ざしている。しかし芸術の歴史が祭儀の歴史と結びつくということは、これによれば正当化されている。芸術についてのより深い理解は、芸術がその完全な発展においても神的なもの象徴化として祭儀に属している、ということを示すであろう。*

経験的に古典古代学の部分として与えられているすべての学問分野は、われわれの区分のなかに含まれている。但し、より多くのものが概念に従っ

* 1830年のラテン語の演説「文学と芸術の認識について」(De litterarum et atrium cognatione) (『小品集』第一巻, 175頁以下)を参照のこと。

て細かく分割される。国家生活は、空間的広がり[・]と時間的広がり[・]とに従った国家の認識を、したがって政治的地理学[・]と政治的歴史[・]を前提とする。前者は予備教育として数学的ならびに物理的地理学[・]を、後者は年代学[・]を有する。国家生活をその国体に従って叙述することは、いわゆる古代遺物の一部、つまり政治的な古代遺物を含んでいる。他の部分は残り三つの主要部分に含まれている。なぜなら、第二節全体は私的な古代遺物を含み、第三節は宗教上の古代遺物と、その他に、それらが単に私的生活に属する技術[・]に含まれない限りにおいて、芸術の歴史[・]全体を含んでいる。それゆえ造形芸術[・]、音楽[・]、そしてあらゆる模倣学[・]である。それに加えて、文献学的である限りにおいて、美学[・]全体。これに対して、その産物が文学全体であるところの弁論術[・]は、— 後述するように — 第四節に入れた方が得策である。建築術[・]、彫刻品としての通貨[・]等々は、それゆえ第三節に属する。第四節は原始的学問としての神話[・]、その統一性における発展した学問としての哲学[・]、そして哲学のいろいろな分枝としての爾余の学問的諸学科[・]を含む。以上が素材の側面から捉えられた知である。次に知の形式を扱うのが文学史[・]と言語の歴史[・]である。前者は修辭的形式を扱い、後者は文法的形式を扱う。なぜなら、言語は知のオルガノンであり、そして言語において最も繊細な認識は最も小さなものにいたるまで表現されているからである。しかしながら、あらゆる特殊な学問分野がいかにして有機的に相互に結合されているか、また何が完全な列举に属しているのかということは、特別な実行がはじめて示すことができる。

わたしは、あらゆる部分の厳密な区別は取り扱いにとってのみ、見解にとってのみ可能であるということ、もう一度強調する。自然においては何物も区別されていない。全体としての古典古代学の一般的部分と特殊的部分の個々の部分は、つねにかみ合い、相互に前提し合っている。しかしこのことは、配置に対していかなる影響も及ぼし得ない。なぜなら、もし理解にとって前提されていることが先立つという視点に従って、これを的確に捉えようとするれば、多くの矛盾に陥るであろうから。万事は必然性をもって相互に有機的に整列している。われわれの配置は、民族の生活をそ

の感覚的作用から段階的に最高の精神的生産にまで導くので、そのなかにはすべての行動において表現されている認識が、その潜在化の度合いに応じて提示される。われわれは、『国家』におけるプラトンのように³¹、あらゆるものが含まれている国家をもって始め、精神的生産の最終発展をもって閉じる。われわれはおそらく、理念の象徴化としての芸術は神話よりも後に考察されるべきである、とすることができるだろう。その理由は、芸術は外的なものを表現するが、神話はその基礎となっている内的なものを表現するからである。しかし内的なもの、つまり神話の考察は、あらゆる

³¹ プラトンの長篇『国家』は、第一巻から第一〇巻まで間断なく続く長い会話の連続であるが、その大筋は以下のようなものである。

ソクラテスはあるとき、「正義とは何か」という議論に参加したが、彼は個人における正義の拡大された姿を国家において見ることを提案し、ここに国家の起源と生成から出発して、模範となる国家のあり方が論じられることになる。

国づくりの中心は、国の統治者の人づくりにあるとして、まず、幼少年期に行われる詩歌・音楽・体育による教育のあり方が検討される。つぎに国の統治者の資格と選抜、その生活条件と任務が語られ、国家を構成する三つの異なる階層とそれぞれの役割に基づいて、国家ならびに個人がもつべき〈知恵〉・〈勇氣〉・〈節制〉・〈正義〉の四つの徳が定義される。ソクラテスはさらに、理想国家を実現するためには、哲学者が国を統治すべきだとの持論を展開し、かくして議論は「哲学者とは何か」へと移行する。ソクラテスは、哲人統治者が学ぶべき最も重要なものは〈善〉のアイデアであるとして、〈善〉のアイデアとそこに至る哲学的認識のあり方を、「太陽」「線分」「洞窟」の三つの比喩を中心に詳細に説明する。「魂の目の向け変え」としての教育の理念、具体的なプランも、そこから導き出される。ついで、理想国家が不完全国家の四形態へと転落していく過程と、それに対応する個人の性格が詳述されて、不正ではなく正義こそが、人間を幸福にすると結論される。そして最後に、詩歌・演劇の本質が哲学的に考察されたのち、魂の不死の論証が試みられて、長大な対話篇は幕を閉じる。

より詳しくは、『プラトン全集』第11巻(岩波書店、1976年)の巻末に収められている藤沢令夫氏による「解説」を参照のこと。

知の考察同様、祭儀と芸術における象徴化そのものの助けによって獲得される、認識のより発展した段階であるので、まさにそれゆえに後の方に置かれるべきである。さらには、第四節において思惟の普遍的形式である言語を、知の実質的考察よりも先に扱わなければならない、と考えることもできるだろう。なぜなら、言語はあらゆるものに先んじて存在しているからである。とはいえ、あらゆる教養の萌芽と要素はほとんど同年齢であり、したがって時間的な区別はつけることができない。言語、神話、あるいは哲学がより早く成立したかどうかは重要ではなく、むしろ重要なことは、いかなる連続においてそれらが意識に上るかということである。このことはわれわれの配置において表現されている。神話は歴史的にも真つ先に意識の中に入ってきて、そのあとで哲学と個々の学問が、そのあとで叙述のいろいろな形式についての教説と、こうした形式そのものが、つまり修辞学が、そして最後によく文法的観点における言語が、意識の中に入ってきた。ひとはつねに言語を使用しているが、それにもかかわらず、それは文法的考察によってはじめて意識される。文法のなかには、最も個別的なものに至るまでの認識の最終的かつ最も繊細な分析が与えられている。それゆえ、文献学の諸学問の最後の仕上げ (θρηγκὸς μαθημάτων) としての言語は、われわれにおいては最後に現れる。文献学の歴史は、ヴォルフにおけるように、最後の学問分野として立てることはできない。それによって古代における文献学的学問そのものの発展が意味されている限り、文献学の歴史は古代的学問の歴史に属する。爾余のものは近代の学問の歴史に属する。古代の教えそのものに関しては、爾余のものは文献目録的付加においてのみ顧慮され得る。それゆえ、文献学の歴史の一般的特質はその場所を一般的部分の付録として見出す。

われわれはわれわれの配置を絶対的に必然的なものとして主張するわけではない。しかしわれわれの配置は学問的考察に最もよく合致しているように思われる。例えば、ヴォルフの草案に見出されるような、通常の処理の仕方は、経験的知識にとって心地よさをもっているかもしれないが、直観的な認識にとっては間違いなくそうではない。しかしわれわれはたしか

に初っ端でエンチクロペディーと方法論の相違を承認したのであるから、経験的知識は重要ではない。方法は一般的に正反対の歩みをしなければならない。そこで言語学はもちろん方法的にわけても学ばれる必要があるが、しかし以上のような理由によって、エンチクロペディーにおいては、言語学は経験主義よりも前に置かれるべきである。経験主義とは所詮、学問的感覚の欠如であり、概念の錯綜状態だからである。われわれの実行に関する限り、われわれは重要なものを何も見過ごさずに、事物の核心を、つまり主導的なもののみを与えるであろう。

§ 14. 文献³²。

³² 原著ではこれに続けて、約8頁にわたる文献解題が収録されているが、紙幅の制約上、この部分の翻訳は割愛する。